

## 少女雑誌の部屋から

紆余曲折、賛否両論ある中、オリンピック・パラリンピック東京大会の開催時期が迫ってきましたね。オリンピックは明治29(1896)年のアテネ大会にはじまり、夏季大会は今回が32回目となります。日本が初めて参加したのは明治45(1912)年第5回ストックホルム大会。昭和3(1928)年第9回アムステルダム大会でようやく日本人女性初のオリンピック選手として人見絹枝が出場を果たし、初挑戦の陸上女子800mで銀メダルを獲得しました。オリンピック前後には少女雑誌の中に特集が組まれることもあり、当時の「平和の祭典」への注目度の高さが窺えます。



## 雑誌紹介 16

明治30年代～昭和40年代に発行された少女雑誌の中から主なものについてご紹介します

## 少女号 (小学新報社/新報社) 大正5(1916)年12月号～昭和3(1928)年3月号

清水かつらは編集の傍らで童謡詩人として「靴が鳴る」、「叱られて」、「雀の学校」など多数の童謡を発表した。表紙絵や挿絵では本田庄太郎らが活躍。掲載作品は冒険小説、マンガ、お伽話、翻訳物語など幅広いジャンルにわたり、「通信欄」には読者と編集者、あるいは読者同士の交流も見られた。

## 小学少女 (研究社) 大正8(1919)年5月号～昭和3(1928)年3月号

小学校低学年向けの雑誌で、従来の幼女雑誌に比べると読む記事に力を入れており、童話、童謡以外に学習ページも設けられた。竹久夢二が表紙絵や挿絵を描いているほか、童話では吉屋信子、与謝野晶子、小川未明ら、童謡では西條八十や三木露風らの名も見られた。

## 少女雑誌を彩った挿絵画家たち 16

## 須藤しげる (すどう しげる) 1898—1946

愛知県挙母町(現・豊田市)出身。本名は源重<sup>げんじゅう</sup>。

14歳で上京し、岸田劉生<sup>りゅうせい</sup>から油絵の手ほどきを受ける。しかし、油絵は制作に費用がかかることから、10代後半になると日本画に転向し、中村岳陵<sup>がくりょう</sup>に師事。その後も生活は困窮し、生活費を稼ぐために雑誌の挿絵などを手がけるようになる。大正5(1916)年、『少女画報』に掲載された「花物語」(吉屋信子・作)の挿絵を描いたのをはじめとし、『少女倶楽部』、『少女の友』、『令女界』などの少女雑誌のほか、『少年倶楽部』でも絵を発表し、挿絵画家として活躍した。昭和初期には、『婦人倶楽部』や『週刊朝日』といった大人向け雑誌にも描くようになる。

画家として、絵を描くことに対しての情熱を生涯持ち続けた。

須藤しげるの作品を観るには・・・豊田市郷土資料館(愛知県豊田市)

## 少女雑誌の豆知識

## 人見絹枝さんのこと

オリンピック選手として活躍した人見絹枝は明治40(1907)年、岡山県生まれ。幼少期より活発な少女だった一方、女学校時代から文章が巧みで、少女雑誌に匿名で短歌を投稿するなど、文学的資質を認められていました。美容師の草分け的存在として知られる吉行あぐりとは岡山の女学校で同級生だったそうです。大正15(1926)年、大阪毎日新聞社に入社。記者として働きながら競技練習を続け、昭和3(1928)年に日本人女性として初めてオリンピック出場を決めたのでした。